

## 白馬寺管見

望月海淑

## 1 白馬寺

平成二年九月、縁あって洛陽を訪れ、白馬寺にお参りする機会をもった。白馬寺は洛陽の東十二キロ位のところにあり、その途中でやや北より道を変え七・八キロも行くと、そこは黄河であった。そして、白馬寺のすぐ東側は一面の畑であったが、かつて漢や魏の時代（25～264）には、洛陽城があった所だという。

白馬寺は並木の続いている道を、ふいと左に曲がったらいきなり現れたという感じで建っていた。レンガを積み重ねた、文字通りのベンガラ色の塀で囲まれ、塀より高いレンガ色のアーチ型の入り口をもった山門を備えていた。本来の寺院の形態である四角な境内をもった寺であると思われた。

入場料を払って中に入り、お参りをした後に、白馬寺のことを紹介した書物、『中国文物小叢書』というのを買った。以下はこの書の中で、「永平求法与白馬寺」と題された所の文章の翻案と、そこに述べられている説示に対する資料の展開である。そしてこのようなものを公にするのは、今日以降に洛陽の白馬寺を訪れる人にとって、更に突っ込んだ訪問となりうればと思っただからである。

## 2 白馬寺の「縁起」

『魏書・釈老志』や『洛陽伽藍記』等の書物の記載によると、漢の明帝劉莊は夜、身長が丈六にもおよび、頸の後部から白光を出す金色の人が、宮殿の庭に飛んで来たという夢をみた。そこで帝は群臣に質問をした。すると大臣・伝教は明帝に語った。「西方に神がいます、その名は仏といい、姿形は陛下が夢にみたものと同じように思われます」と。そこで明帝は、郎中の蔡愔と中郎将の秦景等に十余人の従者をつけて、天竺へと向かわせ、仏の經典と仏法とを求めさせた。蔡愔と秦景の一行は西へ向かい、大月氏国（今の中央アジアのアフガニスタン一帯地方）に到着し、著明な仏教学者でもある天竺の高僧の摂摩騰と竺法蘭に会い、更に仏の經典と釈迦牟尼仏の像をも手にいれ、使者達はこの二人に中国への来朝を請願して、一緒に洛陽へ帰って来た。

洛陽は中国の歴史上の名城であり、「九朝の故都」と素称されていた。東漢の国都である洛陽城は全国でも最大の城市であるが、同時に当時の世界の中でも、第一流の繁栄した城市でもあった。

摂摩騰と竺法蘭の二僧は洛陽に来ると、鴻臚寺（官署名）に住し、共同して最も早期の漢訳經典たる『四十二章經』を訳出した。その後、竺法蘭は『十地断結經』『法海藏經』『仏本生經』『仏本行經』等の仏教典籍を陸續として訳出した。この漢代訳出の『四十二章經』は、仏教伝播の上で重要な作用をもっている。

今、白馬寺の毘盧閣の内壁の後には、清代に彫刻された『四十二章經』の刻石がはめこまれているが、漢の明帝は非常にこの著作を珍らしがられ、皇室図書館の蘭台石室にこれを保存するように命じられた。仏教の合法的地位はこれによって正式に承認された。中国における沙門と禮拜の法はこれから始まった。これはわが国の仏教史上に著明な

「永平求法」といわれ、民間流伝の「唐僧の取経」はこれより五百六十多年の後のことになる。

明帝は摂摩騰と竺法蘭の二高僧を重んじ、勅命して洛陽城の西の雍門の外三里、道の北側のところに、仏教伝統様式の第一座僧院を建立させた。大月氏国より白馬の背に經典と仏像とを載せて来たと言えらるので、これは白馬寺と名付けられた。「寺」の字は鴻臚寺の「寺」に由来するもので、後になって漸く仏教の僧院の称呼となった。

白馬寺の名称に関しては一種の伝説がある。古代インドに一人の国王がおり、各個の僧院をこわそうとして命令を下した。しかし招提寺の僧院は未だこわされなかった。その時、国王は夜中に一頭の白馬が塔をめぐりながら悲しげに鳴いているのを見た。王はその靈異を信じ、僧院の破壊を止めさせ、招提を改めて白馬としたが、それ以後、僧院には白馬と名付けられることが多くなつた、と。

今、白馬寺の後には磚の墻とをもつた高台があり、その高さは六米で、東西の長さは四十二・八〇米、南北は三十二・四〇米であり、清涼台と呼ばれている院がある。伝えによると、漢の明帝はここに來たつて読書をしたといい、後になつてここに經典と釈迦牟尼仏の像が置かれ、摩騰と法蘭の二人はここで經典を訳し、居住したともいう。そしてここはこの寺の中で、現存するものの中で最も古い建築遺跡といわれている。

摩騰・法蘭の二人の高僧はここで入寂したので、白馬寺内に葬られている。すなわち二人の墳墓は、寺の門内の東西の両側の松柏の林の中にある。その墓は石が嵌められた円形の塚であり、墓前に石碑が建てられているが、これは明代の崇禎七年（一六三四）のものである。

というのが、白馬寺縁起に載せられていた白馬寺の根幹である。更に漢の明帝劉莊の創建以來二千年という長い年月がたち、世の移り変わりは激しく、時には栄え時には廃れた。そして東漢（後漢）の時、中原には少数の寺院だけ

があり、外国から中国へ来た仏教を信ずる西域の商人が集まっていたが、中国人の出家はなかった。そして魏の斎王芳の嘉平二年(二五〇)にインド僧・曇柯迦羅が白馬寺に来て、戒律たる『僧祇戒律』を訳出し、僧も日増しに多くなり、洛陽の寺も四十二ヶ寺に達し、著明な竺法護もここで『文殊師利淨律經』『魔逆經』『正法華經』等の九十余部の經典を訳出した。等々遺物の紹介を展開しているが、後はカットすることにする。

### 3 明帝の夢について

このような白馬寺に伝えられて来た縁起を整理して見ると、漢の明帝が黄金の人を夢に見て西方に求めさせたという、いわゆる感夢求法説と、白馬にかかわる伝説との二つの部分から成り立っていることが分かる。そこで、これらのことに詳しい鎌田茂雄博士の『中国仏教史』第一巻等に、このことを訪ねながら見ていこう<sup>(1)</sup>と考える。まず白馬寺縁起(以下単に「縁起」とする)は、書的記載として『魏書・釈老志』と『洛陽伽蘭記』を挙げているから、それから見ていくことにする。

『魏書・釈老志』には孝明帝が夜に金人の夢を見た、頂に白光あり殿庭に飛行して来たので、群臣に訪ねた。伝説は仏だろうといい、帝は郎中蔡愔と博士の弟子秦景等を天竺へおくり、浮屠の遺範を写さしめた。蔡愔は沙門提摩騰と竺法蘭とをつれて洛陽へ帰って来た……と続けられており、ほぼ「縁起」と同様であるが、金人の大きさの説示がなく、明帝令<sup>三</sup>画工<sup>二</sup>図<sup>一</sup>仏像<sup>上</sup>置<sup>三</sup>清凉台<sup>二</sup>及<sup>一</sup>頭節陵<sup>上</sup>とあり、白馬が塔の周りを鳴きながらまわったという伝説がないところが異<sup>(2)</sup>なっている。

『洛陽伽蘭記』では、白馬寺は漢の明帝が立てたところとした上で、明帝は黄金で身長六で項背から日月の光明を

放つ神・仏といわれるのを夢に見て、使いを西域に派遣して求めさせ、經と像とを手に入れた。時白馬負<sub>レ</sub>經而來、因以為<sub>レ</sub>名といい、明帝が崩御したので祇洹を陵上に起こした。これより以後、沢山な人々が塚の上に或は浮図を作り、寺の經函は今も猶存し、常に燒香や供養がなされており、經函は時に光明を放ち堂宇を耀やかすので、世の道俗はこれを礼敬した、等と示されている。

すなわち、明帝の夢と白馬が經典を背負って来たということ、明帝の崩御の後になって寺がつくられ、人々がお参りしたということだけで、經典を求めに行った人や翻訳をした人などの記述などはない。

したがって「縁起」の記事は、これら二書を参照しただけで出来上がったものだとはいいたいであろう。そこで鎌田博士の『中国仏教史』によって、明帝が夢見た金人に関する説話の載せられている書物を列記してみると、次のようである。

a 『後漢紀』 b 『後漢書』 c 『四十二章經』 d 『水經注』 e 『牟子理惑論』 f 『洛陽伽蘭記』 g 『冥祥記』 h 『化胡經』 i 『釈老志』 (鎌田博士の表示によって魏書を省略した) j 『高僧伝』等であるが、この中で h を除いて他はすべて、金色の身体をしていたとなしている。そして a・b は身体が長大だとしているのに対して、d では大人としており、f・g・h では六(丈六)のミスブリだと思われる) とか、二丈とか六尺とかとなして、具体的大ききの数字を挙げている。又 j を除いては項・頂・身から光をだしたとなされ、c・e・i・j などでは空を飛行して来たとなされている。

すなわち、明帝が夢に見た像が金色をしていたということ、光をだしていたということでは、諸本あまり異同はないといえるが、空中を飛行するということと、わけでも身体の大きさに関しては、大層な異同があるといわなければ

ばならない。このことは何を意味するであろうか。

#### 4 使者等の名前について

「縁起」は、大臣・伝毅の言によって明帝が西方へ、郎中の蔡愔と中郎將の秦景等に十余人をつけて送り出したとなしている。これに対して諸本の記述は以下の通りである。

『四十二章經』 伝毅の言により明帝は、張騫と羽林中郎將秦景と博士弟子王遵等十二人を派遣、彼らは仏經四十二章を持って還った。

『牟子理惑論』 伝毅の言によって明帝は、中郎蔡愔と羽林郎中秦景と博士弟子王遵等十八人が行き、彼らは写仏經四十二章を持って還った。(張騫の名は大正藏經所収本には記されていない)

『魏書・釈老志』 伝毅の言によって、郎中蔡愔と博士弟子秦景等とが行き、彼らは浮屠の遺範を写し沙門摩騰と竺法蘭とを連れ、仏經四十二章と釈迦の立像とを得て還った。

『高僧伝』 伝毅の言によって、郎中蔡愔と博士弟子秦景等が行き、彼らは摩騰にあって還り、摩騰は四十二章經一卷を訳出した。

『冥祥記』 群臣の言によって、蔡愔が行き、迦葉摩騰を連れて還り、優填王画と釈迦倚像をも持って還った。

『水経注』 群臣の言によって、使いが天竺へ行き、彼らは写經と像を白馬の背にのせて還った。

『洛陽伽蘭記』 使いが行き、經と像を得て、白馬の背にのせて還った。

と、いったようであるが、これを整理すると、伝毅の言によってなされたという書と、群臣の言によってなされた

という書と、明示をしていない書との三種の記述があることが分かる。このうちの伝教については後に譲ことにして、明帝の前にいた誰かが西域派遣を口にしたと、簡単に考えておけばよいのかもしれない。

次に使者としては、蔡愔と秦景とが一般的であるが、これに王遊を加えたものもある。しかし博士弟子が秦景になったり王遊になったりしており、蔡愔の官名がまちまちであったりしている。このように、これらの各書物の記事が首尾一貫していないのは、不思議なことに思われるが、確かな記述がなかったためかもしれないと思われる。

そこで疑いの眼をもつて見ると、『四十二章経』には張騫の名が示されている。この張騫に関して『化胡経』の中には伝教の言をうけた明帝が、張騫等を派遣し、彼らは仏教の河源を窮め、三十六国をへて舍衛國に至ったが、その時に仏はすでに涅槃に入っていたため、写経六十万五千言を持って、永平十八年に中国へ還って来た、とある。

ここに出てくる永平十八年というのは、西暦七十五年のことであり、張騫が大月氏国へ向かったのは、前漢の武帝の時であったから、それは紀元前百四十年ごろのことである。すなわち『化胡経』の記述では、張騫は二百数十年も西域にいたことになってしまう。『化胡経』は道教にかかわるものを集めた記事だから、その立場での批判だといったところで、あまりにも時が違っているようである。

そのためだろう『笑道論』なるものには、この記事に関して「これ亦妄作……その妄引を笑うべきなり」と批判が載せられて、前漢の武帝の時の人が後漢の明帝の時にいる筈がないではないかとなされている。

この張騫に関しては、鎌田博士の『日本仏教史』小野玄妙博士の「仏教経典総論」に詳しいが、張騫の名について『化胡経』等の筆者から批判された関係者は、それ以後、張騫の名を消して蔡愔に入れ替えたのではないのか、ときえいわれているから、<sup>(4)</sup> どうも歴史に忠実な記述ではなかったのだろうか。とすると、『化胡経』が示す張騫の西域へ

の出張と六十万五千言にのぼる写経を將來したという各書の記事にも一考を要するというべきであろうか。

しかして、西域のことを明帝に言上した伝毅なる人物について、鎌田茂雄博士は『後漢書』の記事によって、伝毅は明帝の次の章帝の時に初めて徵召された人であり、彼は建初中（七六—八四）に闕台の令史となり、老中を押し、班固などとともに校書を司どった。したがって明帝よりも後の時代の人であるから、明帝が伝毅の言によって使者を送ったというのには、年代的に無理があると指摘している。<sup>(8)</sup>

張騫について伝毅なる人物についても、このように歴史的に問題があるとするならば、次は經典の訳者についてレポートを試みなければならないであろう。

## 5 摩騰と法蘭

「縁起」には撰摩騰と竺法蘭とが中国へ来たって『四十二章経』等を訳出したとある。

そして如上の諸經典において訳者の名を示しているものは、『四十二章経』『冥祥記』『魏書・釈老子』『高僧伝』等である。まず「縁起」が示している『魏書・釈老志』を見ると、ここでは西域への使者が撰摩騰と竺法蘭とともに中国へ還って来たこと、蔡愔等の使者達が四十二章を得て来たこと、白馬寺が建てられそこでこの二人は卒したこと、が記されてはいるが、訳出したということは記されてはいない。中国へ来たということは、伝道のためという願いがあつたからこそだと思ふから、經典の訳出は当然のことではあろうが、念のため忠実を期することにした。

そこで『四十二章経』を見ると、張騫等の使者達がこの經典等を写し取って還って来て、寺を建て、ここを中心に仏教が栄え、諸々に寺が建てられたとの記述が本文にはあるが、訳出に關しての記述はない。しかし、現今の大正藏



經を見ると、そこでは經題のすぐ後に、「後漢西域沙門迦葉摩騰共法蘭訳」とあって、二人の訳出であることを示している。これがどのような意味を持っているのか、よく分からないが、『四十二章經序』には摩騰の名はなかったといわれるから、摩騰・法蘭の訳者名の記述は後になってから付け加えられたものなのかもしれない。そこでこれは暫く置くことにする。

これに関して、釈僧祐が撰した『出三藏記集』には、四十二章經一卷について「旧録云孝明皇帝四十二章經安法師所撰録欠此經」とした上で、張騫と秦景とは月支国で竺摩騰にあつて、この經を訳写して洛陽に還つたとあつて、摩騰が訳出にかかわつたことを示している。すなわち、『四十二章經』の經題の次に見られる摩騰・法蘭の二人の名が、『出三藏記集』では摩騰一人になっているのであり、両書には相違がある。

『高僧伝』には撰摩騰は中天竺の人、大小乘經を解し、常に遊化し金光明經を講じたこともあつたが、蔡愔・秦景等は天竺で摩騰にあひ、摩騰は弘通を志していたから、疲苦をも憚らず流沙を涉つて洛陽に來たとあり、「有記」に曰くとして、摩騰は四十二章經を訳し、洛陽の西雍門外の白馬寺に住んだことが示されている。

そして、竺法蘭に関して、中天竺の人で經論數万章を誦したといひ、天竺學者の師となり、蔡愔等にあひ摩騰と共に洛陽に來て、四十二章經等を訳出し、六十余才で亡くなつたと示されている。ここでの「有記」とはどの書なのだろうか。

『冥祥記』においては、使者の蔡愔は西域沙門迦葉摩騰等を得て還つて來たこと、明帝はこれを重くみて供養をなしたと述べられている。

そこで整理してみると、摩騰と法蘭の二人が中國へ來たとするだけのものと、二人が訳出したとするものと、摩

騰等が来たとするものと、摩騰だけの名を挙げて訳出したとするものがある。しかし天竺から中国まで来たということは、仏法を伝えるためであったのは明白なことであるから、来た以上は訳出したといいうるであらう。すると『出三藏記集』が一人だけの名を挙げ、『冥祥記』は摩騰等として、『出三藏記集』に近い表現をしていることが分かる。

そこで、『高僧伝』巻第十四の高僧伝序録を見ると、西域の名僧が次々と来たり、その上、漢の時代から梁の時代まで六代も変わり六百年が過ぎた。この間、群英があらわれ、種々な記録を遺したとして、その書物の名を挙げていゝるが、その中には今まで取り上げて来た南宋の王琰の『冥祥記』と沙門僧祐の『出三藏記集』が含まれている。このことは、この二書は当然『高僧伝』よりも以前に書かれたものであることを意味しているといえよう。

すなわち、『高僧伝』が示していた「有記」とは『冥祥記』か『出三藏記集』のことなかもしれない。

しかし、『高僧伝』は漢の明帝・永平十年に始まって、終わりは梁の天監十八年に至る、凡て四五三載、二五七人を載せたとしているから、この書が書かれたのは梁の天監十八年（五一九）より以前に遡ることは出来ない。したがって、『高僧伝』は後漢の明帝の時代よりも四五〇年も後に書かれたものとなる。

そして、「有記」といわれた『冥祥記』の作者の王琰も『出三藏記集』の作者の僧祐も四百年代の人だというから、『高僧伝』からそんなに遡った時代のものではないといいうる。このことはこれらの書の記事には、あまり真摯性を置けないということを意味する。そこで重要な鍵を握るものとして『後漢紀』と『後漢書』を改めなければならぬであらう。

『後漢紀』は晋の哀宏がまとめたものだという、晋は二六五年から三一六年までであるから、他の書から見ると一

番に早い時期の書ということになるであろう。ここには明帝が夢に金人を見た、長大で項に日月のような光があったので、帝は群臣に質問をした。中に一人答える者があった。西域に仏という神があるといいますが、陛下の見た夢はそれではないでしょうか、と。そこで帝は使いを天竺へ派遣し、法や仏像等を求めさしたとある。しかし、そこには使いの固有名詞や摩騰らが来て経を訳したというようなことは、まったく触れられてはいない。

『後漢書』は宋の汜華の撰になるものだが、そこには世に伝う。明帝が夢に金人を見た、項に光明があったので帝は群臣に質問をした。中に一人答える者があった、西域に仏という神があるといいが、その形は大きく一丈六尺もあり、黄金の色をしているといいますが、と。そこで帝は使いを天竺へ派遣し、仏法を求めさしたから、遂に中国へも仏の画像などが伝えられたとある。ここでは『後漢紀』に比べて、仏像の大きさが具体的に示されたことが異なるが、他はほぼ同じで、僧侶や經典の将来については全く触れられていない。そして最も大きな違いは、「世伝」として、このことが世間において伝えられて来た話だとしている点であろう。

このことは『後漢書』は『後漢紀』の説示を受けとめて書きとめたものであろうが、明帝と仏教伝来に関する記事については、世間に伝えられていた噂であって、歴史的事実かどうかについては、撰者自身が疑っていたのではないかと思わせる。

したがって鎌田博士は、『後漢紀』の素朴な伝説にやや潤色を加えたのが、『後漢書』の記事であるとし、「或曰」として伝教や張翥などの名を挙げた他の各書等は、まったくの創作であって史実ではなくてたらしめな記事であるとしている。

すなわち、これら各書のうち比較的古いといわれている『牟子理惑論』『化胡経』等には、摩騰など僧の名は挙

げられていない。摩騰の名が出て来るのは、南宋の王琰の『冥祥記』が一番に古く、他は『高僧伝』『魏書・釈老志』などであり、他に『出三蔵記集』にも四十二章経を訳したとあるが、これらの書はすべて四百年代に書かれたものだから、この説示は疑わしいといふ。

そして法蘭が出て来るのは、『魏書・釈老志』『高僧伝』等であるから、摩騰よりも更に遅い時期の書であり、更に疑わしいといふ。ちなみに法蘭の訳に関する説示は『高僧伝』において、十地断結・仏本生・法海蔵・仏本行・四十二章等の五部を訳したが(「縁起」もこのことを記しているから、『高僧伝』によつたのだろうか)四部を失い、ただ四十二章経のみが遺つたとあるが、この遺つたといわれる『四十二章経』も、『歴代三宝紀』においては撰摩騰訳とされている。そして、この『四十二章経』なる経は、梵夾の翻訳ではなく、抄訳でもなさそうで、初心の者が遠来の三蔵から仏教の何かにつけて聞き取り書きでもしたという体のものだ、<sup>(14)</sup>とさえいわれるものであるから、法蘭という人物が果たして中国に來朝したのかどうなのか、まことに疑わしいといわなければならないであらう。

## 5 白馬寺

「縁起」は白馬が經典を背にのせて來たので白馬寺となしたこと、古代インドの王が僧院をこわした時、夜中に白馬が鳴きながら塔の周りを回つたから僧院が遺つたといふ、そのため白馬寺という僧院は他にも多いとしている。この「縁起」は冒頭で紹介したように、『魏書・釈老志』と『洛陽伽蘭記』等によつたとしているから、この両書から見ることとする。

『魏書・釈老志』には、白馬の背に經をのせて漢にやつて來たので、洛陽城の雍闕の西に白馬寺を立てたとあり、

『洛陽伽蘭記』には、白馬が経像をのせて来たので、それにちなんで名をつけた、とある。この二書の記述の内容には大差はないと思われ、「縁起」もこれによつたものと想像することができるが、しかしこの二書には白馬が塔を鳴きながらまわつたという記述はない。

他の書の中で『高僧伝』には、摂摩騰の住居は洛陽城の西の雁門の外の白馬寺であるとした上で、相伝だと断りながら、外国の国王がかつて諸寺を壊した、その時、招提寺はまだ壊されなかつたが、夜中に白馬が来て鳴きながら塔の周りをまわつた。そこで王は諸寺を壊すのを止めさせ、これにより招提を改めて白馬寺とした、とあり更に、ために白馬寺という名の寺は多くあつたとしている。

この『高僧伝』の説示は「縁起」の説示と大変に似通っている、白馬にかかわる「縁起」の説示の展開は、『高僧伝』によつたのかもしれない。

ほかでは『水経注』に、経等を白馬の背にのせて来たから、白馬をもって寺の名にしたのだとあるだけで、他の各書にはほとんど記述が見られない。まさに「相伝」といわれるように伝説であつたのかもしれない。

## 6 その他

以上見て来たように、摂摩騰・竺法蘭や白馬寺の伝説等々、にわかには信ぜられないところではあるが、西晋の時代（二六五～三一六）には、すでに洛陽の西門外に白馬寺があつたことは間違いないといわれている。

竺法護は二八六年（太康七年）八月に『正法華経』を訳し、二八九年（太康十年）四月には『文殊師利浄律経』を訳し、十二月には『魔逆経』を訳しているが、これらの訳出の舞台となつたのは、洛陽門外の白馬寺であつたことは

ひろく知られているところである。

すなわち、『出三藏記集』には正法華經記第六として、出經後記が載せられている。そこには、太康七年（二八六）八月十日燉煌菩薩法護が、手に胡經をとり口に正法華經二十七品を宣出し、長仕明等が筆受し、九月二日に終わった。そこで天竺沙門の竺方と亀茲居士帛元信とが参校した、とあり、更に、正法華經後記第七 作者未詳とした上で、永熙元年（二九〇）八月二十八日、比丘康那律が洛陽において正法華經を写し終わった。時に張季博等は手に經本をとり、白馬寺に詣でて法護と対したとある。<sup>(15)</sup>

したがって、塚本善隆博士は、西晋の洛陽白馬寺は、初期仏教界に次第に名を知られるようになったであろう。その白馬寺が、すでに成立し流布しつつあった明帝感夢に由来する仏教伝来の説をとりあげて、白馬寺の宣伝運営に資するようになるのも自然な成行きである、<sup>(16)</sup>と述べている。また、鎌田博士は、後漢末に荊州に白馬寺と名づけられた一寺が建てられたこと、西晋頃には、洛陽城の西にあった寺が白馬寺と呼ばれていたことは確實であるといえる、<sup>(17)</sup>と述べている。

明帝没しておよそ二二〇年、後漢末は三国時代を迎える準備に入っていた。時に魏の曹操は白馬寺を中心とする仏教関係者、道教の五斗米道の関係者等と、親密な関係を保ちながら魏の国威を掲げていったといわれているが、当時のような形であったにせよ、白馬寺があり、そこに人々がおり、活動を展開していたと見ることは出来るであろう。

〔註〕

- (1) 鎌田茂雄『中国仏教史』(第一卷二〇六～二一八)
- (2) 『魏書・釈老志』卷一百一十四、釈老志十(王雲五主編、台湾商務印書館印行本一〇、三二二上下)
- (3) 『洛陽伽蘭記』(大正五十一・一〇一四中下)
- (4) 『後漢紀』(卷十)、『後漢書』(王雲五主編三九一一下三九二上)、『四十二經序』(大正十七・七二二上)、『水經注』(卷十六)、『牟子理惑論』(大正五十二・四下～五上)、『洛陽伽蘭記』(大正五十一・一〇一四中下)、『冥祥記』(大正五十三・三八三中)、『化胡經』(大正五十二・一四七下)、『魏書・釈老志』(卷一百一十四釈老志十)、『高僧傳』(大正五十・三二二下～三上)
- (5) 『笑道論』(大正五十二・一四七下～八上)
- (6) 鎌田茂雄・前掲書(一一二～一一四)、小野玄妙「仏教經典總論」(『仏書解説大辭典別卷』)(二〇～二三)
- (7) 鎌田茂雄・前掲書(一一四)
- (8) 鎌田茂雄・前掲書(一一三)「とくに蔡愔は『冥祥記』になって張翥の代わりに登場した人」。小野玄妙・前掲書(二二)「流石に其の後に出了た北齊魏取の魏母釈老志には、此の「使者張翥」の四字を抹消してしまい、歴代三寶紀已下其の後の記文には、復た張翥の名を見ないことになり、或はかの張翥に代へて蔡愔の名を挙げてゐるが」。『後漢書』(王雲五主編「宋紹興刊本」三七六三上～六四下)
- (9) 鎌田茂雄・前掲書(一〇九、一一〇)
- (10) 『出三藏記集』(大正五十五・五下)
- (11) 『高僧伝』(大正五十・四一八中下)
- (12) 『後漢紀』(卷十)
- (13) 『後漢書』(王雲五主編 三九一一下三九二上)
- (14) 小野玄妙・前掲書(二四上)
- (15) 『出三藏記集』(大正五十五・五六下五七上)
- (16) 塚本善隆『中国仏教通史』(第一卷五〇～五一)
- (17) 鎌田茂雄・前掲書(一一七)

白馬寺管見(望月)